

子供たちの労働意識

Children's perspectives on work

Save the Children*

I 訳者まえがき

イギリスでは最近児童労働（労働する子供たち）に関する研究が、社会史、心理学、社会政策、経済史などより広い分野で活発になされているという。歴史的課題として論じられてきた児童労働は、これまで定着した見解の延長上に捉えられてきた。今日児童労働が注目されるのは、児童労働が過去の時代の問題として軽視されつつあることへの危機感の表れといえる。たとえば M. Lavalette は、①イギリス社会に今もなお多国籍企業が介入した大きな搾取的児童労働市場（製造工場など）が幅を利かせ、厳しい労働に追われる多くの子供たちが依然として存在する。しかも法的規制が十分に作用せず悪化の一途を辿りつつある、②児童労働が歴史的に多くの子供たちの生活基盤の一部を担い続け、また社会が通念的に児童労働を受け入れてきた背景がある。そのため今日においても一般社会の児童労働に対する関心が薄く、その労働実態への反応も鈍い (Michael Lavalette, ed., *A Thing of the Past?*, St. Martin's Press, 1999, p. 1), といった指摘をする。つまり児童労働問題を再浮上させることによって、現代社会の諸問題の再検討を促したものである。

今日児童労働を大人の視点から考察する研究が大きな流れとなっているが、その一方で子供たちの心理に焦点を当て、子供の目線を通して現代の児童労働を幅広く再考しようとする新たな試みも始まっている。以下に紹介するケース・スタディ (Save the Children, 'Children's perspectives on work', *Children and work in the UK*, CPAG, 1998) もその1つであり、イギリスの一般労働者家庭の子供たちの労働意識について示唆に富んでいる。働く現代っ子の生活、労働心理の一面が巧みに覗かれており、イギリスの現代子供社会の特徴を学ぶ上でもこの調査は非常に有益な情報を提供してくれる。今回はそうした新しい試みを紹介する。翻訳紹介にあたり、原文表記が望ましいと思われるもの（地域名、脚注など）は一部そのまま引用している。調査活動グループ Save the Children に感謝の意を表したい。

II 子供たちの労働意識

西欧諸国で働く子供たちの姿には、「第3世界」の国々における「児童労働」で想起されるほどの深刻な面はない。し

かし、UK では子供が働く度合いはそれなりに意味がある。事実子供たちにとって、働くことはノルマとなっている。雇用には広い範囲でいろんなタイプのものがある。主なものとして配達、行商（呼売）、小売業、農業（家畜の飼育）、仕出し、子守りなどだ。子供たちがする仕事のタイプとか領域について注目される研究はあるが¹、子供たちが自分の仕事をどのように考えているのか、仕事が自分にとってどのくらい重要なのか、また仕事が自分の生活にどのような役割を果たすのか、といったことはほとんど知られていない。本論は、UK の4つの地域に住む11歳から16歳の子供たちを対象に、調査活動グループが行った実質調査に基づいている。ここでは子供たち、若者という表現は、同じような意味で用いられている。

方法論と背景

全体で90人の子供たちが1人または2人ずつになり、2回に分けた面接に参加してもらった。子供たちとの接触は、活動グループと提携した若者と地域プロジェクトやいくつかの学校を通して行われた。この実質調査は、子供たちが自分の関わる仕事をどう思っているのか理解することを重視したものである。労働に関わる若者の事例は、田舎や都市部を含めたさまざまな状況を反映している。事例には、低所得層地域に住んでいる者や少数民族派出身者も含まれる。事例は無作為に抽出したものでなく、また全体として人口比例に基づいた統計によるものでもない。この調査対象となった若者たちは、UK の以下4地域の出身者である。

Peterlee, County Durham

24名がダーラム州ピーターリーの一都市近郊出身である。この地区は1950年代新しく開発された町で、人口は31,200人。男子労働者の失業が14%（男子労働者の4分の1以上が1年以上失業状態にある）、と失業率の高い地域で若者の失業率が高い。若者たちが面接を受けたこの都市近郊地域は、その特徴として失業、父か母のみの家族、病弱、犯罪、薬物常用と環境的に不利な状況を抱えている。

London

面接を受けた19名はロンドン出身である。このグループは3つの少数民族派に属し、アイルランド出身の商会営業員、ヴェトナム出身、バングラディッシュ出身からなる。

ロンドンでは、アイルランド系営業員社会は官公庁地域を中心にしっかり根づいている。この営業員の子供や若者の少数派は大きな学校に通っている。地域社会の人間として、彼らは特に医療や他の公共サービス利用また雇用機会を得やすいということで、差別を受ける。ヴェトナム地域社会は、南西部ロンドンで香港からの避難民としてこの地に入り、20年以上にわたり定住している。バングラディッシュ地域社会は、UKではごく最近住み始めた少数民族グループで北部ロンドンに居住する。多くの家族は低所得で、住環境が貧しく高い失業に直面している。彼らは民族主義による差別体験を非常に憂慮している。

Rural Scotland

17名がスコットランドの2カ所の田舎地方で生活している。うち何人かは北西山岳地方のある小さな町やその近隣に住んでいる。ここでの主な雇用先は観光、魚の加工工場、それに土産物の製造である。季節労働は非常に重要で、観光客用の宿泊や仕出しまかないと関わっている。他は小作地や村にまたがって人口が散在する地域からの出身者である。この地域での雇用先に、同じように観光関連、加えて小作地、林業、漁業がある。最寄りの小さな町は車で約1時間半。若者たちは長時間バスに乗って登校する。

Belfast, Northern Ireland

30名は西ベルファスト出身である。彼らは西ベルファスト内の3つの指定区域から集まった。うち2つの指定区域は非常に不利な環境にあり、高い失業率と失業手当に大きく依存した生活者が多い特徴を抱えている。若者の失業はこれらの地域では深刻な問題であり、16～24歳の27%が常用雇用を経験したことがない。

調査対象グループの年齢と性別

全体的には男子44名、女子46名のつり合いの取れた割合になった。これは地方によって異なる。たとえば、面接ではスコットランドでは男子より女子のほうが多く、ロンドンのケースでは、特にヴェトナムやバングラディッシュ地域社会出身の男子が女子より多い。グループの大半は14～16歳で、3分の1は13歳かそれ以下であった。16歳のグループは在学中で最年少卒業年齢以下であった。つまり児童雇用法に触れる年齢にあるということになる。11名はアイルランド営業員地域社会から、4名はバングラディッシュ、4名はヴェトナム地域社会から面接にやってきました。

年齢	男子	女子	合計
11	2	4	6
12	5	1	6
13	6	10	16
14	12	7	19
15	10	15	25
16*	9	9	18
合計	44	46	90

*最年少卒業年齢以下

子供たちの労働経験

仕事の定義

この調査の目的のため、私たちは子供たちの「仕事」を有給と無給（大人の場合有給になるだろうが）に限定した。このかなり狭い定義は、家の周辺で手伝うといった家事を排除している。この種の仕事は女子が伝統的に男子より関わりやすく、この調査に性の偏見が入り込みやすい。この定義を使用する根拠は、この調査方針が適切であるということを示すためである。UKでは、働く子供たちを取り巻く法制度が有給で働く子供たちに大きく関わっているからだ。

地域	現在働いている	過去に働いた	働いたことがない	合計
スコットランド	8	6	3	17
ロンドン	13	4	2	19
ベルファスト	9	17	4	30
ピーターリー	10	10	4	24
合計	40	37	13	90

上の表でみるように半数弱が何らかの形で現在働いており、また過去に41%が有給労働の経験をしている。4分の1弱は労働の経験がない。

雇用のタイプ

若者たちは幅広い範囲の仕事をしており、次のような仕事—子守り、新聞または牛乳配達、市場仕事、炊事場仕事、ウェーター／ウェイトレス、持ち帰り店での受付係、ペット預かり所へ犬を連れて行く、造園係、調髪業、店の仕事、家の留守番、建設作業、カーペットを敷く係り、カーペットの訪問販売、ダンスやエアロビクスの指導係、ホテルの仕事、清掃、魚売り（自分たちで捕獲した魚）、私設養老院での仕事、楽器演奏者、馬屋番の従業員、水泳プールの係員—が含まれている。

彼らが頻繁に携わる仕事は子守りと配達業である（配達業は他の研究調査でも立証された彼らの仕事の1つである）。子守りは男子より女子が関わり、すべての地域で

みうけられる。しかしながら子守りに対し違った姿勢が表れている。ベルファストの事例では子守りを仕事であると即答したのはほんの数名に過ぎず、さらに15名が子守りをお金が稼げる趣味として述べている。ピーターリーでは、子守りは明らかに仕事であるとみなされた。営業員家庭からきた女子のうち、何人かは子守りでお金を請求できないと感じている。

ロンドンに住む少数民族グループの若者たちがする仕事の領域は、この調査対象（子守り、新聞配達、店やレストランでの仕事）になった他の子供たちのケースと似通ったものになった。しかし営業員家庭の子供たちは、さらに広範囲の仕事に関わっている。

働く理由

面接を受けたほとんどの若者たちの働く理由は、お金を稼ぐことだ。若者の大半は、仕事は暇時間をつぶす方法だとか、「町の中をあちこちうろつくの控えるため」とかいいながら、自分の仕事が好きだと語っている。また仕事の経験を積んでいけるし、責任を持たされるとも感じている。

お金

「そうね、個人的には一文無しにうんざり」

女子、14歳、スコットランド出身、仕事をしていない

「だってお金ないから、わずかでもいいからお金欲しい…」

男子、14歳、スコットランド出身、調理場清掃係

大半の子供は仕事をする主な理由にお金をあげる。お金を稼ぐことは、特に仕事を楽しむということではなく、まさにお金のために仕事をする子供たちに重視される。

「新聞配達…楽しい？」

「う～ん、ちっとも、でもお金は役立つから」

男子、14歳、ロンドン出身、新聞配達員

上述した若者の大半は、稼いだお金で自分たちのものを買う。服やCDが好きで外出や社交化を好み、レジャーにお金をかける。彼らはお金が自分たちに与えてくれるチャンスについて語ってくれた。彼らが述べた行動は若者たちの学外生活や仕事の重要な領域でもある。

多くの子供は稼いだお金を貯める。これはおそらく高価なレジャー用品（釣りざお）の購入か祭日や贈り物のためであろう。クリスマスのためにお金を蓄えるのは一スコットランドの子供たちにとって本来季節労働（夏季のみ）であるため一特に重要である。1人の少年が、孤立

した地域では物を運送する重要な手段だからと、17歳になったとき（2年後に）車の購入と運転免許証を取るためにお金を蓄えていると話してくれた。何人かは将来のために、また何人かは大学に行くために、などと述べた。営業員家庭の何人かの少年は、いつでも結婚できるようにまた大人になったら家を造れるように、お金を蓄えていると語った。

「稼いだお金で何をやるの？」

「銀行に預けておくんだ…15歳になったら結婚して、結婚費用にするんだ。そして車と一それにカーペットも何枚か買いたい」

男子、11歳、ロンドン出身、カーペット販売員

家にお金を入れる

話に応じてくれた大半の子供は、自分たちのためにお金を使うと語っている。その一方で、何人かは家の経済的事情におかれている。若者の大半は、教科書や靴や衣服といった学校での必需品にお金を費やしている。

「…母さんがパートタイムの仕事しかしていないし、弟はすぐ大きくなるから衣類なんかどっさりいるの。わたしたちお金が欲しいから家族全員が働くの。自分たちのお金が必要だから」

女子、15歳、スコットランド出身

「お金欲しいから。服を買いたい。母さん服をたくさん買ってくれないから、それにお金もくれないし…服が欲しいから全部貯めている」

女子、14歳、スコットランド出身

「学校へ行くのに何がいるか、そんなことわかっているよー鉛筆や本やそんなものさ」

男子、13歳、ロンドン出身

数人の子供は自分たちが稼いだお金を直接家に入れている。ある年少の子供は、稼ぎの一部を食費代として親に渡しているという。

「両親がお金に困っているときには、時々お金をあげる。だって養ってもらってるから」

女子、16歳、ロンドン出身、カーペット販売員

「行商（カーペット販売）で稼いだお金、半分は母にあげます」

女子、14歳、ロンドン出身、カーペット販売員

「いくらかは銀行に入れて、週末には多分外出して…それから母さんに少しあげて…母さんお金あまり稼げない。それで助けてあげるの」

女子, 16歳, ベルファスト出身

「時々お金(母に)あげる。時々学校やその他のことでお金要るから」

男子, 13歳, ロンドン出身

自立するために

何人かの若者にとって、自分で稼ぐことは両親からの自立を意味する。

「うん、お金が欲しい。親からもらうより何かをして稼いだほうがいいよ」

男子, 14歳, スコットランド出身, 自動車修理工場従業員

「お金のために働くんだ。それ全部使う。そうしないと母さんに金くれといわなきゃならないから」

男子, 14歳, ロンドン出身, 新聞配達員

お金を稼ぐ以上に、子供たちや若者たちは仕事をする多くの理由をあげている。よくあげられる理由の1つは、外出して退屈しのぎをしたいということだ。

「週末に少し稼いで、それで外出して、退屈しないでいい…いろんな人に会えるし」

男子, 14歳, ベルファスト出身, 新聞配達員

「家の近くでは面白いこと何もないわ。つまらない。だってどこに住んでいると思う? 同い年で話し相手がないわ」

女子, 16歳, ロンドン出身, カーペット販売員

「お金があると休日には何かできるわ。若い子がこのあたりですること、ほとんどないから」

女子, 14歳, スコットランド出身, ウェートレス

「家にずっといてパソコンをいじっているより、稼いだほうがいい…それに仕事好きだから」

男子, 15歳, ベルファスト出身, 新聞配達員, 建設作業員

「お金欲しくてするんじゃない、でも楽しいから。退屈しのぎさ」

男子, 12歳, ピーターリー出身, 新聞配達員

他の若者は、仕事が自分たちの労働生活体験に役立つと考え、後で他の仕事に就きやすいと考えている。

「仲間になってどんな風に働けばいいかわかるわ。そこで他の人とするようにね。それに他の仕事に移るとき、記述できるじゃない…職歴のような感じで」

女子, 15歳, スコットランド出身, キャンプ場の受付係

「稼ぎは少ないけれど、ウェートレスだという責任を感じるわ。どんな風に注文を取るのか、それに大人になったらどのようにすればいいのかわかるわ」

女子, 16歳, ベルファスト出身, ウェートレス

「学校を出る前に、自分のしたいことに慣れようと思っているんだ」

男子, 15歳, ベルファスト出身, ウェーター

それ以外の若者は、自分たちが大人のような扱いを受けたとか仕事に責任を持たされたとか、また自分たちが頼りになることを示せるとか述べている。

「子守りをすれば、それなりの責任があるわ。わたし2歳の子をよく子守りしたの。それに周りに何か起きないかと気を配らなきゃ」

女子, 13歳, ピーターリー出身, 子守り

「仕事をすることで信頼されるんだわ、と思う」

女子, 16歳, ピーターリー出身, 子守り

子供たちが働きたいのは、お金が欲しいからである。彼らはこのお金でいろんな機会を得る。退屈をしのいだり、仲間と交遊したり、体験したり、敬意の念を抱いたりする。興味深いことに、仕事をする理由は性別や民族性を越えて共有されている。アイルランド営業員家庭の若者、バングラディッシュそれにヴェトナムの若者たちは、仕事をするのはお金を稼ぎ、交友し、体験したい、といった似通った理由をあげた。

子供たちは自分の仕事をどう思っているのか

若者たちの話しぶりから明らかのように、仕事は彼らの生活に大きな役割を占めている。働くべきかどうかといった迷いはみられない。たとえば面接を受けた半数以上が、彼らと同年代の若者は何らかの仕事を持つべきと考えている。

仕事を楽しむ

働く理由について先ほど強調したように、大半の若者は自分の仕事を楽しんでいると語る。外出し交友することが、彼らの仕事に対する大きな要素となっている。知らない人々と出会い、仕事を通じて友達と交際できるからだ。

「外出していろんな人に会うのが大好き。お話できるから」

女子、15歳、スコットランド出身、ウェイトレス

「人に会えるから。いろんな国の、めったに会えそうにもないいろんな人に。そんな人と喋ってみたいわ」

女子、15歳、スコットランド出身、キャンプ場の受付係

「わたしたち2、3日に1度しか会えない。でも会いたいし、ぶらぶらしたい…2人でカーペット売りに出かけるの、楽しいわ。そんなふうにお金を稼ぐの。稼いだらぶらぶらする。でも稼げなくてもぶらぶらする」

女子、14歳、ロンドン出身、カーペット販売員

「この仕事気に入っているわ。話すのが好きだし、周りとうまくいっている」

女子、16歳、ピーターリー出身、美容師

私設養老院で働く1人が、この仕事に満足していることを語ってくれた。

「非常に満足しているわ。この施設で働けるなんてうれしい。みんな、わたしの親もじいちゃんばあちゃんも、それに先代のじいちゃんばあちゃんのことも知っているの…何かいいことしているって感じちゃう」

女子、15歳、スコットランド出身、ウェイトレス（介護アシスタントの経験あり）

子供たちには、仕事をする中でいいことが他にもあるという。親からもっと尊敬してもらえりし、もっと社会に順応できるという。また新聞配達をすればもっと強くなれるともいう。何人かの子守り役をしている子供たちは、幼い子と一緒にいるのが楽しいと語ってくれた。

仕事で楽しくないこと

子供たちが経験する仕事や仕事に対する見方を、あまり楽観的に描くのは正しくない。彼ら全員が携わる仕事を楽しんでいると限らないからだ。

「土曜日になっても、いつも同じ仕事の繰り返しよ。

本当にうんざりする」

女子、14歳、スコットランド出身、クリーニングの店員

新聞配達をしている子供の多くは、仕事で大変疲れるという。早起きをしてあちこち走り回り、仕事を終えて学校へ行かなければならない。牛乳配達と新聞配達をする何人かは、寝不足になっていると語った。

「放課後と一緒に。かなり疲れるよ。みんな新聞を待っているから、山積みの新聞配達なんて大変さ」

男子、14歳、ロンドン出身、新聞配達員

「本当に早く起きなきゃ—疲れる—それに時々寝坊して配達できないとなると、仕事先のおじさんがやらなきゃならないだろう？たくさんの新聞を自転車に積まなきゃならないし、これまた重いんだ」

男子、13歳、ロンドン出身、新聞配達員

新聞配達や一軒一軒訪問するカーペット売りの子供たちにとって、犬を飼う家を怖がるケースもある。また何人かは、事がうまくいかないとか仕事がおおごとになってストレスを感じると述べている。

「時々気絶しそう。まるでそこで死んでしまいそうな感じ。この仕事していると本当にストレスがたまる」

女子、16歳、ベルファスト出身、ウェイトレス

「本当にきつい—疲れるわ—盛り皿持って階段を歩き来したり、洗ったりしなきゃ。掃除機かけなきゃならないし、とにかく全部よ。大変だわ」

女子、16歳、ベルファスト出身、ウェイトレス

子守りの仕事をしている数人が、仕事からくるストレスについて語った。ある少女の話では、新生児の世話で本当に困り、その子が大丈夫かどうか絶えず確かめざるを得なかったという。

「Hさんの赤ん坊を世話していたときは、私が部屋から出ても赤ん坊が心配になってすぐ部屋に戻ったわ」

女子、16歳、ロンドン出身、子守り

他の子供たちは、幼児の大きな集団を管理するとき生ずる問題や、自分たちが幼児を傷つけたり、家具を壊したりしないかといったことを語った。数人の少女は、食事の雇い主や顧客からいじめを受けたことを述べている。

「私はその方に出来上がりの料理を差し出し、いったんです。「本当に熱いですから手に十分気をつけてください」と。そうするとその方は、「ああ、わかっている。おまえもこんなふうに入れてみてえもんだ」…私は黙っていました…頭にくるわ、あいつらときたら。本当に面くらってしまう」

女子, 15歳, スコットランド出身, ウェートレス

仕事をしているときの子供たちが受ける待遇

子供が仕事を経験する場合、まず重要なことは彼らが仕事をしているときどのように扱われているのか、ということだ。面接を受けた子供たちに、仕事をしているとき公平に扱われたかどうかたずねた。大半が雇い主から親切にしてもらったと感じ、また同僚との関係も十分なものであったと感じている。民族差別の声は出なかった。性別による報酬について、あるコメントがあった（下記参照）。

「大人と同様に責任があります。だから大人と同様の扱いを受けます」

女子, 14歳, ピーターリー出身, 子守り

少数派の経験であるが、彼らが大人たちとどう比較されていたかという返答もあった。

「大人は待遇がいい—仕事の内容は同じなのに、大人は大事にされる。雇い主は知っているのさ、大人たちはバカじゃないということ」

男子, 16歳, ベルファスト出身, 調理場の守衛

「若いものには誰も耳を貸さないのよ。あそこに女の子がいたんだ。30代のふけた女。仕事をなまけてさ。あたしたちを前に出すんだ。本当に大変だった。それで女にやってやった。そしたら仕事辞めろ、とさ。あいつら若いものということ聞こうとしないんだ」

女子, 15歳, ベルファスト出身, 調理場係

「若いと、何でもかんでも最悪。仕事であろうが場所であろうが…まずは掃除、それにお茶くみから始まるんだ」

男子, 16歳, ピーターリー出身, 牛乳配達員

「ちっちゃなことでうまくいかないのよ（トラブルなど）。でも大人は違うんだ。わたしたち農場で大人より働いているのに。もっと働いているのに」

女子, 16歳, ピーターリー出身, 犬の散歩係

もう1人の子は、時折雇われるのは雇い主が実習する必要がないと考えているからだ、という。

「ほとんどの仕事は大人がするのよ。実習のようなものもあるだろうし。その点わたしたち、たんに何かすればいいと思われているんだわ」

女子, 14歳, スコットランド出身, ウェートレス

このことは、大人の仕事と子供の仕事に対する、若者たちの仕事の見解にはっきり反映されている。彼らの見解から、大人の仕事が経験と資格を要求するものだ、ということがみえてくる。大人たちはもっと責任を負わされ、重労働をこなし、有望視されると理解されている。賃金レベルも重要な問題となる。子供たちの仕事は、楽で課税も少なく短時間労働とみなされている。また保護という形で大人より待遇がよいという思いが一般的にある。70名の子供たちが、子供は特別に保護されるべきという意見（意見を述べたうちの88%）に賛成し、1人だけが反対した。

「(大人の仕事さ)ほんとうに。遊びじゃない」

男子, 13歳, ピーターリー出身, 庭師

「大人はもっと責任感を持っているし、時にもっと楽しい仕事に就けるわ」

女子, 15歳, スコットランド出身, ウェートレス

賃金

若者の大半は、自分の仕事に応じた賃金をもらっていると思っている。ただし地理的条件によって異なる。ベルファスト、スコットランド、ロンドンに居住する若者のほうが、ピーターリーの若者より賃金レベルに満足している。

「うん、オッケー。たったの1時間で10ポンド—上等さ」

男子, 15歳, ロンドン出身, 新聞配達員

賃金が少ないと感じているのは全員、給仕や調理場の仕事に携わっているベルファスト出身の若者たちであった。カーペット売りの若者は、売り上げの一部（利益）からお金をもらう。売り上げの悪いときには、稼ぎがほとんどない。

何人かは、自分たちが経済的に搾取されたとか、されようとしたと気づいていた。何人かは、大人に略奪されたと感じており、また何人かは若者の仕事に対する賃金が非常に悪いことを述べている。

「大人たちは喜んでるわ。あんな程度のお金で仕事しないでしょうから」

女子, 16歳, ピーターリー出身, 子守り, 新聞配達員

「大人はもっともらい, 子供は少なくもらう。子供は自分のする仕事で, いくらもらえるかわからないんだ。」

男子, 14歳, ロンドン出身, 新聞配達員

しかしながら他の子供たちは, 責任能力が対等でない以上賃金は違って当たり前だと意見を述べる。賃金が年齢に応じて増えることの期待がみられた。ある少女の話。ピーターリーでは, 新聞配達で男の子のほうが自分よりもっともらっているし, その理由が男の子の配達地域が広いから(本人は信じていないが), という。

幼児の子守りをする2人は賃金を期待していたが, 実際もらったのかどうか語らなかった。子守りの仕事先が自分の家族関係者とか家族の友人関係者であるため, 賃金についていづらいつと感じていたからだ。いくつかのケースでは, もちろんずっとではないが, 今度頼まれたら子守りの仕事を断りたいと思っている子供たちもいた。新聞配達をするある男の子の話。新聞紙にそれぞれチラシを入れて, 配達しなければならなかった。しかしその仕事の賃金をもらえなかった, という。

「250枚もチラシを入れたんだ。その分のお金をもらっていない。250部で基本給が5ポンド。それにチラシを入れて1.5ポンド—チラシはどんなに分厚くても, 別に渡されるんだ」

男子, 14歳, ロンドン出身, 新聞配達員

子供たちが変えてみたい仕事内容

上述のケースのように, 仕事を否定的観点から捉えることは, 子供たちが仕事で方針を変えたいと述べているものに反映される。たいていの場合, 稼ぎが増えて仕事時間が減りしかも遅くまで働きたくないという。その特殊な例が大量の新聞を配達したくないとか, 犬が吠えていやだとかいったものである。ある女の子は, 仕事の資格を取りたいといった。

仕事の生活密着度

こうした子供たちの生活に果たす仕事の役割を描くにあたって, 私たちは, もし仕事に就いていないとすればあなたたちは何をしていたと思う?といった質問をした。仕事をしている間は自分のチャンスを逃している, と感じたものはほとんどいない。多くは仕事の体験に喜びを持ち, 多くの人々との出会いが得られたという答えが返

ってくる。こうした答えはすべての地方に共通している。テレビをみるとか, 音楽を聴く, 「なにも」, 「退屈だ」, 家事をする, といった類の答えが返ってくる。ある者は, 友人とぶらぶらしてチャンスを逃していると感じ, またある者は, お金があれば友人ともっと外出できるのにと

いう。大半の子供は, 自分の仕事や学校の授業, それに余暇といった複雑な時間帯をしのいでいることを明らかにしている。

「仕事をして, 宿題をして, 夜はプールに出かけて, それに自由な時間は注意しているわ…夏休みには家族で友達と一緒にバーベキューなんかして。働きだすと, たまにそうしたこともできない。でも家に帰れば今まで通りにやっているわ…」

女子, 15歳, スコットランド出身, ウェートレス

子供たちはまた, 友人と外出したいとき, 交渉して仕事の時間をはずしたり変更していることを述べている。新聞配達をする少年の中でも, 部数を決めて自分の時間を調整したり, 日刊紙より週刊紙だけを配達する者もいる。

アイルランド営業員家庭の大半の少女は, 呼売りや, トレーラーを洗ったり, また子供の世話や食事を作らなくてもよい場合, 家事をするという。

「磨いて, 磨いて, きれいにして, きれいにして…朝に, 昼に, 夕に, 夜に, 真夜中に, 何でもかんでも, いつもきれいにしているの。子守りでしょ。掃除でしょ。子守りでしょ。そして掃除…そう, すべてよ。あたしたちよい子だから」

女子, 14歳, ロンドン出身, カーペット販売員

親の役割

子供たちの仕事に対し親の役割は重要である。大半の子供は親のため, または親の友人のために働いているからだ。子供たちは親の役割を認識しており, まず親から仕事の許可をもらうべき, という強い感情が働いている(90人中74人, 約83%がこの意見に同意している)。仕事をしている若者の多くは, 自分たちが経済的に自立できるという理由で, 親が自分たちの仕事を支援してくれると語った。

「母さんは思っているんだ, 十分な年になったから, ぼくは仕事をすべきだと—新聞配達さ」

男子, 14歳, ロンドン出身, 新聞配達員

「全員が口をそろえて—あたしが外でもっと稼がなきゃ、というの。あたしに金をくれ、金をくれ、というの。もううんざり」

女子, 15歳, ピーターリー出身, 新聞配達員

「家族は、ぼくが仕事をしているのを誇りに思っている」

男子, 13歳, ピーターリー出身, 新聞配達員

数人の子供は、労働生活を経験し、自立できるようになり、何かができるようになることに親が喜んでくれる、と報告している。また、親は子供がトラブルに巻き込まれ悩むより、仕事をしてくれることを望んでいる、と何人かの若者が語っている。

「仕事をするのはいいことだ、と両親は考えているわ。学校を出るとき、実社会で仕事がどのようなものなのか学べるから」

女子, 16歳, ピーターリー出身, 子守り

「母さんは思っているよ、家を出て何かするのはいいことだって」

女子, 14歳, スコットランド出身, 清掃係, ウェートレス

子供がする仕事、特にその時間帯や学校での勉強に与えそうな影響を考えて、仕事を留保させる親もいる。

「学校の勉強に差し支えない限り、両親は気にしないんだ」

男子, 16歳, ベルファスト出身, 酒場のグラス洗い

実際多くの親は、子供の労働時間を観察し、学校の宿題と両立できるかどうか確かめているようだ。雇い主がもっと働いて欲しいと圧力をかけると、親を口実に遅くまで働くのを避ける若者もいた。また時折親が現場にやってきて、仕事の交代作業時に子供を集めて、時間通り帰宅するよう確認することもある。

学校や勉強との関わり

私たちは、彼らに次のような質問をした。学校の勉強が仕事の影響を受けているかどうか、また教師たちが仕事をしている生徒のことを、生徒自身どう思っているのか。面接を受けたすべての若者は、義務教育を受ける年齢について知っている。しかし大半の営業員家庭の子供は、正式な教育を受けていない。少数の若者は、自分の仕事が学校の勉強に影響を及ぼしていると感じている。早朝（配達の仕事）あるいは夜間に仕事をしているケー

スにみられる若者たちである。

「集中できない。なぜって非常に疲れるし、それに学校でまた眠たくなってしまうの。勉強に支障が出ている」

女子, 16歳, ベルファスト出身, ウェートレス

「時々たくさんの宿題があるわ。でもそれにうまく合わせている。どこにも行かないでいると、なまくらになってしまいそう」

女子, 14歳, スコットランド出身, 清掃係, ウェートレス

2, 3のケースで、学校の勉強に支障が出て仕事をやめる子供たちもいる。大半のケースでは、子供たちは宿題や授業との両立のことを話し、仕事から得る気晴らしに感謝していた。

若者たちがどの程度まで自分の仕事のことを担任教師に知らせているのか、これはかなり多様化している。特に地方によって異なる。たとえばスコットランドでは、子供たちは自分の仕事は先生と関わりなし、と思っている。仕事のことを教師に知らせないとか、またクラスの大半が仕事をしているから、教師もそのことを問題にしないとか、どちらかのケースになる。これは、学校が休みに入ると、どこでも季節労働に加わる事情があることから説明できるだろう。ベルファストでは、大半の子供は教師が自分たちの仕事のことを知っていないと思っている。また彼らは仕事を認めてもらえないだろうと考えている。

「仕事しているといったら、先生気が狂っちゃうよ…幼いから仕事をしてはいけません、というに決まっている」

女子, 15歳, ベルファスト出身, 経木販売店の仕事

ある教師が、生徒が大変疲労しているという理由で、生徒のパートタイムの仕事に口を挟むことがあった。ピーターリーでは、大半の若者は教師が自分たちの仕事を認めてくれると信じている。ある少女は美容院でパートタイムの仕事をしており、彼女の労働経験計画の一部として始めたものであった。子供たちは、仕事の状況を改善する具体的な計画案を評価するよう求められている。この案の1つが、学校では子供たち自身の仕事を含めた成績評価の一部とみなされることになっている。この計画案は非常に高く評価されており、評価した生徒の48%が満点を与えている。つまり、子供たちが仕事と学校生活の両立に、さらに一貫して取り組んでいきたい、ということを示している。

健康と安全性について

私たちは若者たちに次のような質問をした。危険な仕事に就いていると思うかどうか、また雇い主から安全な作業について、助言や訓練を受けたことがあるかどうか。新聞配達の場合、子供たちが非常に心配しているのは、犬にかまれたり追いかけられたとき、車の往来の激しい通りを一特に暗がりのとき一横断するときである。また見知らぬ者に脅される危険性もある、ということだ。

「冬の朝なんか、あたりは真っ暗でしょ。他人にわかるように、蛍光のついたバッグを持ち歩くの。でも配達が無事終わったかどうか、お店の人知らないでしょ。配達が終わった後、わたしお店に戻る必要ないんだから」
女子、16歳、ピーターリー出身、新聞配達員

若者が新聞配達で抱えるもう1つの悩みは、バッグの重さである。ある子が胸の筋肉を痛め、病院に行ったことを話してくれた。カーペット売りの女の子たちは、誰かに襲われレイプされる可能性や、また彼女たちや雇い主や家族がどのような予防策をとっているか語ってくれた。

子守りはそれに比べ悩みが少ない。しかし、家で1人きりになってしまうことや、幼児を安全に世話できるかどうか心配している、と述べる子もいる。

「もし1人でもむせたら、わたしどうしよう。パニックになるわ」
女子、13歳、ピーターリー出身、子守り

仕出しの仕事をする若者たちは、起こりうる危険性に気づいている。何人かが油で焼けどした経験や、ぬれた床で滑ったり、包丁やガラスで手を切ってしまう危険性を述べている。

雇い主が若者たちに与える安全性の指導基準はさまざま。当然のこととして事前に指導を受ける者や、仕事に受ける者もいる。興味深いことに、調理場で働く子供の大半が教わった安全作業について喋っていたが、学んだはずの食品衛生規定について、誰ひとり触れようと

しなかった。

改善の余地：規則と行動

私たちは、次のような質問を子供や若者にした。UKでは条例違反の雇い主を訴えることができるが、そうした児童労働に関する規則についてどう思うか。また最低賃金など仕事について改善策があるとすれば、どのようなものか。そこで以下のような項目をそれぞれ3つに区分（賛成、わからない、反対）し、答えてもらった（表4.3参照）。

規則に対する姿勢

次のことが明示されよう。大半の子供が、すべき仕事の分野をどう調整したらよいか知っている。したい仕事は何でもできるとは限らない、と多くが賛成しているからだ。主に危険な仕事から身を守るためだ。条例違反の雇い主は訴えられるべきだ、という意見も多い。賃金格差や公平さに関する不安も、最低賃金のあり方に関心を寄せている点で理解できる。とはいえ、特に正式な被雇用者としての権利を持たない以上複雑で、大半の若者は理解しにくい。

労働時間の規制

私たちがたずねた多くの規則は、子供たちが許される1日の、また1週間の労働時間に関するものである。どんな規則も全般的に認められるわけではない。多くの子供（89人中58人が返答）は、午前7時前の仕事は時間的に早すぎて、許されるべきではないという考えに同意した。しかし高い割合（89人中64人）で、午後7時以降の仕事は許されるべきと思っている。いろんな労働時間制限も多くから提示された一暗くなるので、夏と冬には労働時間の変更を許可して欲しい、というものもある。また、年齢別に分けて欲しいとか、時期と休日にも違いを設けて欲しい、という者もある。日曜の労働時間を制約する考えには彼らは強く反対している。16人が賛成する一方、65人が反対している。登校日に2時間に限定した仕事に対し賛成、反対が同数で、さらにいろんな意見があるこ

	賛成	わからない	反対	意見なし	合計
16歳以下に最低賃金を明記する	64	12	11	3	90
16歳以下は午後7時以降の仕事は禁止	58	3	28	1	90
児童労働法に違反する雇用主を訴える	47	12	19	12	90
16歳以下は登校日2時間以上の仕事は禁止	36	10	35	9	90
子供の要望する仕事はすべて許可される	31	4	53	2	90
若者はすべて労働許可証を取得する	23	11	44	12	90
16歳以下は午後7時以降の仕事も可	20	5	64	1	90
16歳以下は日曜日2時間以上の仕事は禁止	16	8	65	1	90

提案	若者たちの提案評価						
	低い評価	中ぐら いの評 価	高い評 価	最大得点 を与えた 人数	総人数	低得点 (10点中)	中間値得点 (10点中)
労働条件に満足しない場合の、 同年代の若者の正式な不満行動について	3	8	69	44	80	8.7	10
時間給について詳細な賃金相場を 雇い主から提出させる	7	9	63	35	79	8.1	9
同年代の若者の被雇用権利を解説する 冊子内用について	1	13	65	23	79	8	9
若者の仕事が学校の成績評価に 加味される制度について	6	0	61	36	77	7.9	9
同年代の働く若者のクラブや ネットワークの必要性	5	21	54	10	80	7	8
同年代の若者の雇用に関し、雇い主が 全員免許登録する制度について	17	18	45	22	80	6	8

とを示している。

行動への提案

意見内容は子供や若者自身に任された。意見は、UKで働く(表4.4参照)子供たちの状況改善策にすべて基づくものである。全得点を与えた半数以上の若者のうち、もっとも人気のあった提案は、仕事の状況が楽しくない場合彼らが用いる不満行動に関するものである。その次にくる人気提案は、働く時間や賃金相場を詳しく教えてくれる伝票を雇い主からもらうということである。3番目の提案は、雇用の権利を解説する冊子の内容に関するものである。こうした提案に人気があるのは、助けて欲しいとか議論して欲しいとかといったものでない限り、子供たちが仕事でいかに公平な扱いを受けていないと感じているか、を反映させたものだ。

結論

表で示された若者たちの見解は、UKの地域性から生じたものである。しかしながら、働く理由やする仕事が多様であり、仕事に対する彼らの姿勢に大きな類似性がみられる。こうした類似性は、ジェンダーや民族性を通じて著しいものになっている。仕事は、彼らの生活において重要な部分を果たしている。お金は自立していくための方策であり、社会的に交遊し、衣服を買い、外食し、レジャー用品の購入を可能にしてくれる。面接を受けた大半の若者は低収入の地域出身者である。また何人かの子供は、大なり小なり家族の収入に貢献している。これは稼ぎの一部を両親に渡すとか、学校の授業で必要なものを自身で購入していることを意味している。大半の若者は所得を蓄えている。多くの若者にとって、仕事はお金を得る以上のことを意味している。新しい人々に出会

い、友達になり、家から離れていく方法でもある。いくつかのケースでは、退屈しのぎの方法でもある。また経験を積むとか自信を得るといった意味でもある。

仕事には不利な点もある。仕事はよく疲れ、ストレスがたまる。あるケースでは、大人に比べて公平に扱われないと感じる若者たちもいる。余分の仕事に対し、その賃金を十分にもらえない、と思っている若者たちも若干いる。性別に関するケースもあった。また何人かは危険な仕事や不愉快な状況にさらされた。親たちは子供の仕事を許可したり、長時間労働から守ったりなど、彼らを観察する重要な役割を果たしている。

面接を受けた子供の大半は、若者は危険な仕事から守られるべきであり、現行の規則は適切でないと感じている。特に夕方や日曜の仕事を規制するのは納得いかない、と思っている。労働時間や賃金について、雇い主から賃金相場などを含む改善策、また雇用される権利の情報をもっと増やす、といった提案がなされた。彼らが最優先する事項は、正式な不満行動を起こすということであった。

* With contributions from Ruth Campbell, Chris Cuninghame, Suzanne Mooney, Carol Nevison, Bridget Pettitt and Paula Rodgers.

注

- 1 S Hobbs and J Mckechine, *Child Employment in Britain : A social and psychological analysis*, Stationery Office, 1997; F Jolliffe, S Patel, Y Sparks and K Reardon, *Child Employment in Greenwich*, London Borough of Greenwich, 1995.